

# 水谷恭史 弁護士

新 61 期 40 歳 高階法律事務所 元毎日新聞記者



大阪大学人間科学部卒。文化人類学専攻で異文化の研究。

卒論は新興宗教集団に何故同世代の若者が帰依するのか、依存するのかをテーマにしました。身近に新興宗教に入信している複数の知人がいたので研究テーマにしたようなところがありましたね。その頃は全く弁護士という仕事は頭にありませんでした。

新聞記者も大学に入るまでは考えていなかったのですが、3回生になってそろそろ就職を意識するところからメディアの仕事を考えだしました。自らの知的好奇心、関心を追求することが仕事になるのは面白いなと。

\* \* \* \*

毎日新聞入社は1996年です。初任は社会部阪神支局（兵庫県尼崎市）で約3年半、サツ回りや神戸地裁尼崎支部などを担当。震災直後だったので復興取材班にも入っていました。次が鳥根県松江支局に約2年半。県政や国政選挙、原発などを担当。そして、大阪社会部で大阪府警捜査一課担当を1年間勤めました。

弁護士という仕事を意識したのは、



このころでしょうか。被疑者が、身体拘束された23日間の間に取調官、捜査幹部の家を夜討ち朝駆けで周り、非公表の捜査情報を求めるような取材活動の中で見えてくるのが、捜査手法や捜査過程への疑問でした。取材を通じて浮かび上がる被疑者の人物像と捜査機関の公式発表で描かれる人物像に大きな離れがあることもしばしばでした。このようなプロセスを知っている人間が弁護士として関与すべきかと。

もっとも、司法改革の動きを知ったのは松江支局時代です。鳥根大学のロースクール開設準備室の動きを取材する中で、過疎地の弁護士、法曹確保について熱心な議論をされている姿をみて、自分も思っていました。

結局7年程の記者生活中、半分以上は刑事事件を追いかけていました。夜討ち朝駆けの事件取材はしんどく、警察や検察にネタを貰いに行く、捜査機関の意に沿わない記事を書く、出入り禁止となることにピリピリしていることに違和感がありました。特ダネは抜けない部類の記者だったのでしょね。デスクからは「お前が特ダネとして出してくるネタは他社が直ぐに追いついてくる」といった小言もいわれていました。

記者として現に生じている問題を広く知ってもらうことや、改善する方向でいささかでも貢献できればと思ってやっていたのですが、オブザーバーであることは認めませんでした。大きな問題にもかかわれると思っていたのですが、目の前で苦しんでおられる方に直接かわられない。弁護士は直接かわられる。目の前で苦しんでおられる方を直接救うお手伝いができると思っていました。

将来どうなるかといったことも考えていました。

\* \* \* \*

悩んだ末、新聞社を辞めて司法試験を受験すると決断し、妻に話したのが、長女が生まれて2週間のと看。妻の方が不安かと思ったのですが、妻は「よかったやん、頑張りや」と明るく応援してくれました。もっとも後から聞くと一晩中不安で泣いていたそうです。

\* \* \* \*

退職が2003年3月、京大ロースクールに1期生で、2004年4月入学。未修コースです。

退職を決めた時には合格者3000人、7割から8割合格といった話がありましたが、ロースクール入学時の学生数からして合格率は3割4割と想っていて、決してロースクールに入ったから安泰とは思っていませんでした。

退職金が20万円程度しかなく、貯金を崩したり、車を売ったり、バイトや奨学金で食いつなぎました。30歳を過ぎて妻と生まれたばかりの子どもを抱えてのロースクール生活でしたが、幸い2007年に司法試験合格し、2008年弁護士登録、現在5年目に入りました。

\* \* \* \*

以前とは逆に刑事事件や虐待事件で記者の取材を受けるという経験もしています。

取材を受けて思うのは、自分が記者時代もつと法律的なことを勉強してから取材すべきだったなと。取材に来る記者をみていると、勉強されていてポンポンと話が進む人とそうでない人がいます。プロから取材をする以上、記者もプロとして勉強しておくべきではと。

弁護士からするとメディアに注目して欲しい、こう書いて欲しいと思う事がよくあると思いますが、その意識が前面に出るとかえって敬遠されることがあります。記者が興味を持つような切り口、プレゼンの仕方も考えるべきです。日本で初めて、世界で初めて、極めて異例というものに食いつきやすいので、「このような裁判はこれまでなかった」というと注目されやすいですね。

記者レクするときは丁寧な資料も必要ですが、ペーパー1枚で要点を書いた資料も作った方がいいかと思えます。

テレビ取材では絵が必要です。一目で訴える絵を作れるか、場を作れるか。どういう絵を欲しがっているか。入廷シーンだけでは工夫がないですね…

集団訴訟での打合せも、記者がキチンと勉強して弁護団と信頼関係を築けば、いろいろな絵がとれるはずですよ。お互いの努力、工夫が必要ですね。

\* \* \* \*

捜査情報については、記者時代も基本的には捜査官情報を鵜呑みにはしないよう心掛けていました。

弁護士になって反対側の立場からみて、捜査官が言っていることは一層割り引いて考えるべきだと思いますね。

警察段階、被疑者段階の取材を担当する記者と起訴後の司法担当記者では取材のスタンスが違うことも注意すべきです。警察段階では捜査官に密着して捜査官から情報を貰う。警察の見立てに沿っていきがちです。司法担当はそこまで警察の見立てに引きずられることはないです。

\* \* \* \*

弁護士としては取材に応じたくないときもありますが、つっけんどんな取材拒否はしないように心掛けています。

相手もプロですが、人間ですから。こちらもプロとして応えられないときもできるだけ誠実に答えるようにしています。なぜ応じられないのか、理由を説明し、記者に納得してもらうようにしています。



誠意のない対応では記者の反感を招き、結果的に不利益を受けるのは被疑者被告人ですから。

司法試験合格者減員の主張については、複雑な思いですね。ロースクール制度ができたことが、自分が法律家を目指した大きなきっかけですから。

ロースクールの後輩のことを考えると、減員、増員反対署名を求められると躊躇せざるをえません。

司法アクセスをよりよくするという司法改革の理念は間違っていないはずです。弁護士にアクセスできない、弁護士へのアクセスを求める市民は今でも多いはずです。弁護士に依頼しやすい、相談しやすい関係にはまだなっていないのではないでしょうか。

急増がもたらす歪みもありますが、司法改革自体の総論は賛成です。減員説には賛成できないとしても2000人程度は維持すべきか…

ロースクール経由で能力の低い弁護士

が出てきているという説は、そうかなと疑問に思います。

\* \* \* \*

「今、新聞社に転職して欲しい」という依頼があればですか？ ハハハ

新聞社から顧問で来てほしいという話は冗談ではありましたが…

今はとにかく弁護士として研鑽を重ねたい、弁護士を続けたいです。

もう少し経つと物を書いて世に問う仕事への未練が再び湧くかもしれませんが、

弁護士になった以上は、という特権意識は取っ払った方がダイナミックなことはできるのかなと思っています。

他の業界を経験してから入ってみると、弁護士の多くがまじめで、安定志向が強いように感じます。成功するかどうかはつきり分かった上でないと前へ進めない。とりあえずやってみようか、という冒険心のある人が少ないのではないのでしょうか。全体としてまわりを固めてから安全に行く。いい意味での無謀さも必要では…